



「舞踊図屏風」(部分) 重要文化財 京都市蔵

第6号：平成26年10月1日 琳派と御所 —— 5

呉服商・雁金屋は、御所との間に今日の言葉では癒着とさえ捉えかねないほど密着した関係があったのではないのでしょうか。東福門院和子のもとに雁金屋から納品された呉服は、当然、彼女のお気にいりの品々であったに違いないでしょう。彼女が着用していた衣装そのものは、勿論現在遺されていません。しかし、それがどのような品々であったかを想像してみることも楽しいのではないのでしょうか。

江戸生まれの彼女は、京の女性たちが着ていた華やかな衣装の流行の様子について、江戸城の大奥に届けられた呉服の品々によって想像し、楽しんでいたのではないかと思います。当時の京の女性たちが着用していた衣装を描いた屏風がいくつか遺されており、その絵姿から、雁金屋の呉服を想像することもできます。例えば、四条河原で繰り広げられていた阿国歌舞伎や見世物小屋に遊ぶ人々や、舞い踊りする女性たちを絵師たちは描き残しています。そこから当時の衣装の一端を想像できる絵をご覧ください。

